

開催地名	栃木県野木町
開催日時	令和7年12月20日(土) 10:00 ~ 11:30
開催場所	野木町役場 新館2階大会議室
語り部	山田 修生(宮城県仙台市)
参加者	野木町役場総務課消防防災交通係長等43名
開催経緯	近年の風水害は大規模化しており、各所で震度6超の地震が発生するなど、いつ本町でも大規模災害が発生するのかわからない状況である。本日は様々な災害の経験や知見をお持ちの講師の方のお話を聞き、地域での防災活動が活発化することを期待したい。
内容	<p>(1)はじめに</p> <p>私は東日本大震災後、総務省からの派遣を受け、希望する市町村や各種団体に赴き、災害時の家庭での対応、自主防災組織の在り方などについて講演を行ってきた。特に印象深いのは、令和6年1月1日に発生した能登半島地震である。実はその1年半ほど前、私は総務省の派遣で穴水町を訪れ、広域行政の担当者と地震や津波への備えについて意見交換を行っていた。その後、防災講演を行い、さらに半年後には富山市でも同様の活動を行った。今回の地震を見て、そうした取り組みがわずかでも役に立ったのであれば、これほどありがたいことはない。本日は、皆さんが日頃から取り組まれている自主防災組織を中心に、避難誘導の難しさ、要援護者への対応、避難所運営などについて、私自身の体験を交えながらお話ししたい。大切なのは、この町の住民の命と暮らしを何としても守ろうという皆さんの志であり、その思いを共有しながら、共に学ぶことが全てである。</p> <p>(2)私が行った自主防災組織の取り組み</p> <p>私は全国で講演を行う一方、自らも一町内会の防災部長として活動している。300数十世帯の中規模町内会で、副会長を長年務めながら、防災の現場に身を置いている。まず取り組んだのは町火消しのあっせんである。消火器の更新自体は多くの町内会でも行っているが、問題となるのが古い消火器の処分である。業者が引き取りを嫌がるケースも多く、町内会として責任を持って対応する必要がある。この点を整理し、住民が安心して更新できる体制を整えた。</p> <p>次に、各班への名札付き腕章の配布、さらに全家庭へのホイッスルの配布を行った。ホイッスルは防災用品のアンケートでも常に必要性が最上位に挙げられる。夜間の女性の一人歩きの防犯にも役立ち、災害時に瓦礫に挟まれた場合でも、音で周囲に知らせることができる。名前を書き込める仕様にすることで、救助時の身元確認にも役立つ。</p>

さらに、消防・警察への通報マニュアルを作成し、冷蔵庫など目につく場所に貼ってもらった。災害時、人はほぼ例外なく頭が真っ白になる。電話をかけても何を伝えればよいか分からない。火災か事故かを聞かれるところから始まるという基本を、平時から確認しておくことが重要である。

加えて、家庭ごとの防災タイムラインの作成を勧めた。地震、水害など災害ごとに、どの時点で誰がどう動くかを決めておく。家族が別々の場所にいる場合でも、最終的に集合する場所を決めておくことが命を守る。自宅避難の考え方、要援護者の把握、側溝点検、防災倉庫の中身の確認、指定避難所・補助避難所・福祉避難所の違いの理解など、日常的に確認すべき事項は多岐にわたる。

(3) 自助の徹底と日常点検の重要性

災害時の行動を時間軸で整理したものがタイムラインである。地震、水害など災害の種類ごとに、自分がいつ、何をするかを事前に考えておくことが重要である。家族がいる場合、災害時にはバラバラに行動することが多い。

そこで、「何かあったら〇〇小学校に集まる」といった取り決めをしておくことが混乱を防ぐ。また、自宅避難の考え方も重要である。すべての人が避難所に行く必要はなく、自宅が安全であれば自宅避難という選択肢もある。その意識を高めるため、自主防災会ののぼりを作成し、活動を可視化した。

災害時要援護者の把握、避難所に行けない人の把握も欠かせない。さらに、側溝点検は内水氾濫を防ぐ上で極めて重要である。側溝は1～2年掃除しないと詰まり、内水氾濫の原因となる。行政が対応する部分も多いが、どこが未対応かを把握するのは地域の役割である。

消防防災倉庫の視察と点検も重要で、何がどこにあり、どう使うのかを知らなければ、いざという時に役に立たない。指定避難所、補助避難所、福祉避難所の違いを理解することも、地域防災の基本となる。

(4) 若い力の活用と多様化する地域課題への対応

全国的に若い人が自主防災組織に参加しないことが大きな課題となっている。しかし、若い人にしかできない役割がある。例えば外国人対応である。災害時、「逃げる」と言っても外国人には通じない。片言でも英語ができる人材は、若い世代に多い。

また、一斉メールやメッセージ配信システムの運用も若い人が得意とする分野である。学校などで使われている一斉連絡システムと同様の仕組みを、防災組織にも取り入れることで、情報伝達の迅速化が可能となる。こうした役割を明確にすることで、若い世代の参加を促すことができる。

(5) 災害の歴史から学ぶことの重要性

災害対応というのは、簡単ではないということ。それを理解するためには、過去の災害から学ぶ必要がある。47年前の宮城県沖地震では、ブロック塀の倒壊により児童が亡くなり、これを契機に日本の地震対策が本格化した。

防災マップは重要であるが、それだけでは不十分である。地域には必ず、何百年にもわたる災害の歴史がある。東海豪雨では想定を超える雨量により、巨大な貯水施設が機能しなかった名古屋城周辺の河川改修の歴史も、過去の災害経験に基づくものであった。

中越地震では、土砂崩れによる車の閉じ込めなど、地形の特性が被害を拡大させた。また、バックウォーター現象による内水氾濫も過去に繰り返されてきた現象である。こうした歴史的事実を、高齢者の話や地域の記録から学び、防災マップに載らない情報として共有することが大切である。

(6) 地震の特性理解と余震への備え

地震には本震と余震がある。東日本大震災では、マグニチュード9の本震の後、大きな余震が繰り返された。本震により、建物はすでに弱っており、余震でも大きな被害が出る。この点を地域で共有し、余震への備えを徹底する必要がある。

また、マグニチュードとモーメントマグニチュードの違いを理解することも重要である。最初に報道される数値は暫定値であり、後により正確なモーメントマグニチュードが示される。専門的な内容ではあるが、正確な理解が冷静な判断につながる。災害時には、必ず被害状況の写真を撮ることが重要である。片付ける前に、スマートフォン等で現場の状況を記録しておくことが、後の罹災証明や保険対応に役立つ。

(7) 東日本大震災の体験

東日本大震災当日、私は自宅マンションにいた。横揺れの後、突き上げるような縦揺れが来た。縦揺れは必ず被害を出す。私は専門家として多くの地震を見てきたが、この時は「このまま死ぬのではないか」と本気で思った。

全壊のマンション内では女性たちが半狂乱となり、そして、阿鼻叫喚の状況であった。私は大きな声で「大丈夫だ」「心配ない」と声をかけ、深呼吸を促した。災害時、地域の誰かが落ち着いて声をかけることが、どれほど大切かを実感した。

東日本大震災では午後2時46分という日中の発災であり、多くの男性は仕事で地域におらず、避難所には女性や高齢者が中心となった。雪が降り、寒さが厳

しい中での避難となり、毛布や防寒具の重要性を強く実感した。こうした経験から、避難時にすぐ持ち出せる防寒対策を家庭内で準備しておく必要がある。

また、町内会などで行われる避難訓練は、土曜日の午前中など参加しやすい時間帯に設定されがちであるが、災害はそのような条件では起きない。日中に女性だけで地域を支える状況や、避難所が工事中で十分に使えない状況など、あえて厳しい条件を想定した訓練を行うことが重要である。都合のよい訓練だけでは、実際の災害時に対応できないことを、私たちは経験から学んでいる。

(8)地域で支え合う防災

災害時に地域を支えるのは、日頃から顔の見える関係を築いてきた人々である。

自主防災会に女性リーダーを配置し、民生委員や町内会の福祉委員、福祉部と連携することで、高齢者や要支援者への対応が可能となる。実際に、中学生が同行して要支援者宅を訪問する取り組みも行われ、若い世代に防災意識を伝えると同時に、地域全体の力を高める効果があった。

要支援者名簿については、個人情報への不安から登録をためらう人も多いが、名簿に載っていない人も含めて、地域として把握しておくことが必要である。名簿は必要最小限の関係者で管理し、協定に基づいて活用することで、災害時の迅速な支援につなげることができる。防災は一部の人だけが担うものではなく、女性や福祉関係者を含めた多様な視点と役割分担が不可欠である。

災害は発災直後だけで終わるものではなく、その後の生活再建が長く続く。東日本大震災では、私も、在宅避難者や一人暮らしの高齢者のもとを訪ね、命を守る支援を行ってきた。その中で特に重要なのが罹災証明である。罹災証明は各種支援を受けるための基準となるが、その存在自体を知らない人も多く、一軒一軒説明し、申請を支援してきた。

避難所運営では、避難者の増減を想定し、名簿の作成や掲示、トイレ対策など、細かな配慮が求められる。水害時には無理な夜間避難を避け、自宅内での垂直避難を選択する判断も必要であり、そのためには事前に避難する部屋を決めておくことが重要である。さらに、避難ビルや避難タワーの確認、近隣施設との協定など、複数の選択肢を持つことが地域の命を守る力となる。

これらの取り組みは一度で完成するものではなく、訓練と見直しを重ねながら継続していくことが何よりも大切である。

	
開催地より	<p>講師の方の実体験や様々な知見に基づく臨場感ある講演を聞くことができ、参加者は勿論、防災担当として日々防災について学んでいる職員も、新たな知識を付けることができ、とても良い講演会となった。</p>